

なぜ彼女たちはヴェールを着用し始めたのか

もりた とよこ
森田 豊子*

2015年11月13日のパリ襲撃事件から1年が経った。英国は国民投票でEUからの離脱を決め、米国では移民排斥を訴えるトランプ氏が次期大統領に当選した。フランスでは極右政党のル・ペン率いる国民戦線が躍進している。これらの背景には移民の問題がある。特に問題とされているのは、ムスリム移民である。オイルショック(1973年)以降、新たな移民の受け入れを制限した欧州に定住することを決めた中東や北アフリカからの移民たちの2世は2001年の9・11事件後の「イスラーム嫌い(イスラームフォビア)」に直面する。「イスラーム＝テロ」というレッテルから、女性たちがかぶるヴェールも問題視された。2004年にフランスで成立した、公立学校でこれみよがしな宗教的表象を禁止する法律は、さすがにムスリムのヴェールだけを禁止するものではなかった。しかし、2010年に成立した「公共空間において顔を隠すことを禁止した法律(いわゆるブルカ禁止令)」が対象にしているのは、イスラーム教徒の女性たちのヴェールだった。理由として挙げられるのは、ヴェールは女性が抑圧されている象徴であるということだ。2016年夏にはイスラーム教徒の女性がビーチで着用する水着(ブルキニ)を禁止する条例が物議をかもした。

彼女たちは強制されてヴェールをかぶっ

ているのだろうか。ヴェールを脱ぐことは解放なのだろうか。ここで紹介する2冊はそんな疑問に一石を投じるものである。エジプトもインドネシアも人口の9割がイスラーム教徒の国であるが、法律でヴェールが強制されているわけではない。しかし、これらの国で自らヴェールをかぶろうとする女性たちが増加しているという。近代化が進むと宗教は色褪せ、女性は「解放され」てヴェールを脱ぐだろうという単純な図式では説明のつかないこの現象について、それぞれの考察を見ていこう。

後藤絵美『神のためにまとうヴェール-現代エジプトの女性とイスラーム』中央公論新社、2014年

本書は2部5章から成る。第1部「聖典とヴェール」では、イスラームの聖典クルアーンにおけるヴェールの解釈及びヴェール着用の議論について書かれている。第1章「クルアーンとヴェール」では、クルアーンにあるヴェールに関する3つの啓示が下された状況とそれらの意味についてイスラームの古典文献を使って明らかにしている。歴史的資料によれば、イスラーム以前に中東や地中海沿岸地域で女性がヴェールを着用することは珍しくなかった。そんな中、預言者ムハンマドによってヴェールの啓示がもたらされた背景には、預言者の妻

*鹿児島大学グローバルセンター特任准教授

や娘が奴隷女性と間違えられて嫌がらせを受け、自分が守られた女性であることを知らせるため、慎みのない者たちから女性たちを守るための隔たりが必要とされたからだという。さらに、「外にあらわれているもの以外、飾りを見せないように」という啓示では、覆うべきは奴隷女性ではない「自由女性」の「顔と両手を除いた」身体部位とされた。そうするとヴェールをかぶるのは「自由女性」だけとなるが、そこに「フィットナ」という女性の誘惑による社会の混乱という概念をもとに、奴隷女性でも非ムスリムでも女性の身体を覆うべきであるという主張へと変わっていった。

第 2 章の「現代エジプトと『ヒジャーブ』」では、一般に頭髪や身体を覆うために着用するものを指す「ヒジャーブ」という言葉の意味の解釈をめぐる論争について書かれている。1994 年に掲載された記事に、ヒジャーブは衣服ではなく帳（とばり）を意味するものであること、また、クルアーンの啓示でヒジャーブが必要であるとされたのは奴隷女性と自由女性を見分けるためであるから、奴隷女性がいらない現在、ヒジャーブは義務ではないと書かれていた。それへの反論で、啓示による命令はムスリム全体に対するものだと論争がおきた。筆者はこれらの論争の根拠となる典拠や記述が恣意的に取捨選択されていることを明らかにした。ヒジャーブが義務かどうかの議論はその後も続いたが、2000 年代頃からヒジャーブが義務であるという声が社会の中でますます高まってきたという。

そこで、第 2 部ではどうして女性たちがヒジャーブをかぶり始めたのかの分析へと移る。第 3 章「ヒジャーブをまとうまで」は、エジプトの国立大学の学生組織であるイス

ラーム団体が発行する宗教冊子、説教師が宗教講話を録音したカセットテープの中で語られるヒジャーブが取り上げられている。ある宗教冊子では 4 人の女性の会話形式で話が進められる。4 人のうち 1 人しかヒジャーブをまもっていなかったが、もう 1 人の女性が説得を受け入れ、ヒジャーブを身につけるようになった。ここでは、ヒジャーブの着用がムスリムの義務であり、ヴェールの着用によって敬虔であると見なされ、男性の視線や悪質な行為から身を守ることができ、同時に、社会的に不道徳とされている行為を予防できることで、社会の秩序を守ることできると説明されている。また、敬虔な女性であると見なされることで、結婚相手に純潔を求める傾向のある男性にとって価値のある女性でいられるというのである。

第 4 章「人気説教師とヒジャーブ」では、彼の影響により多くの女性たちがヴェールをまとうようになった説教師アルム・ハーリドの説教を分析している。ハーリドの説教の特徴は「女性のフィットナ」という言葉を用いないことである。女性のフィットナとは女性の魅力による誘惑が引き金となる災いのことであり、ここから女性が有害で恐ろしい存在と見なされることになる。しかし、ハーリドは自尊心である「ハヤー」を用いて論じた。フィットナ論では男性が女性を守るために、また男性が女性の誘惑という試練に打ち勝つためにヒジャーブをまもわせることになるが、ハヤー論は女性自身の内面に訴えかけるものである。女性が男性に影響力を持つことを自覚した女性たちが自らヒジャーブを身につけるのだという論理となる。

そこから、第 5 章「芸能人女性の『悔悛』

とヒジャーブ」は、ヒジャーブをまとい始めた女性の例として、芸能人を取り上げている。エジプトでは、過去 25 年の間に 40 人以上の有名芸能人がヒジャーブの着用を選択し、引退したり、活動の場を変えたりした。彼女たちは「悔悛した芸能人女性たち」と呼ばれた。この現象をまとめた冊子の分析によれば、その経験にはいくつか共通点があった。病や近親者の死に直面したときに、夢を見たことによって、また巡礼や礼拝などの宗教行為の中で、女性たちはヒジャーブの着用を決意したという。

これまでヒジャーブについて、イスラーム以前の古典文献からクルアーンの啓示の注釈書など実に幅広い宗教的な根拠から多様に解釈されてきた。そんな中、現代エジプトで女性たちが「神のために」、「ムスリムだから」とヒジャーブを着用し始めた。ヴェール着用者が増加する現象の背景に、女性が主体的にヒジャーブを着用しようとするきっかけとなる「信仰心」とヒジャーブをつなぐ言説が、社会の中に、そして個々人の中に広く深く浸透するという状況があったことが本書で明らかになった。ヴェールを着用するムスリムの増加については、エジプトだけでなく、各地で観察されており、それぞれの歴史や文化に基づく説明がなされるだろうが、本研究による説明と共通する点も見つかるはずであると締めくくられている。

野中葉『インドネシアのムスリムファッションーなぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版、2015 年

本書は 6 章と終章から成る。第 1 章「ヴェールをめぐる様々な議論」では、一般にヴェールが女性蔑視の象徴とされ、ヴェールの着用がテロと結びつけて捉えられているが、エジプトなどイスラーム諸国では 1970 年代頃から都市部の女性たちの間で「再ヴェール化」が起きている現状がある。インドネシアではスハルト体制後期から民主化黎明期の時代において、先駆的にヴェールを着用し始める女性が出始めた。先行研究では、女性たちは土着性や西洋的近代性への決別、体制に押しつけられた役割への抵抗などの理由で着用を始めたと言われた。時代が下り、スハルト崩壊後の社会が安定すると、近代教育を享受し始めた女性たちが自らの選択で着用するかどうか決めているという研究や、社会的プレッシャーや経済的な理由によりヴェール着用者の増加を説明する研究も見られた。本書はこれらの先行研究を踏まえ、1980 年代以降からの女性たちのヴェール化についてインタビューなどを中心に分析している。

第 2 章「インドネシアのイスラーム - 『亜流』のイスラーム?」では、インドネシアのイスラームの特徴について述べられている。インドネシアは人口の 9 割がイスラーム教徒であるが、イスラームは国教ではなく、6 つの宗教が公式宗教となっている。多様な宗教、文化、政治的イデオロギーでいくつかの文化類型に分かれるとされてきたインドネシアでは独自のイスラームのあり方が見られたが、1980 年代頃からの開発独裁による生活レベルと教育レベルの向

上によって生まれた都市部の中間層の中で、イスラーム的にふるまうことが経済的に成功した象徴となり、ライフスタイルのイスラーム化が進行した。1998年にスハルト体制が崩壊すると、スハルト時代の学生運動ダアワ運動のメンバーたちが創設した政党が勢力を拡大した。ダアワ運動とは大学生たちがイスラームを学び、実践しながら学内や周囲にイスラームを広め、よりよいイスラームの理解と実践を呼びかける運動である。スハルト崩壊後の民主化とイスラーム主義の台頭の時代、ジルバブと呼ばれるヴェールをまとった女性が出始め、2004年にユドヨノ政権が誕生して政治が安定化すると、ヴェールの着用の増加は加速したという。

第 3 章「『ジルバブ』着用者の出現と拡大」では、ヴェール着用の増加の経緯が書かれている。1980年代以前、ヴェールの着用はごく少数に限られていた。1980年代以降、アラブ世界でヴェール着用の増加現象は「再ヴェール化」と呼ばれたが、インドネシアでは「初めてのヴェール化」といえる現象であったという。開発独裁であったスハルト体制は、大学生たちが始めたダアワ運動の締め付けのために学校でのヴェール着用を一時禁止した。この措置への反対運動の中で、女性たちが着用し始めたヴェールは「ジルバブ」とばれた。1990年代からスハルトはイスラームに対する態度を軟化し、学校でのヴェール着用を解禁した。大学ダアワ運動のメンバーや卒業生たちは政党を立ち上げ、スハルト退陣の原動力となった。この運動の女性メンバーたちは、少数であったが白いジルバブを着用して政治活動に参加していた。

第 4 章「ジルバブを着用した女性たちの

証言」では、筆者の 8 人の女性へのインタビューから浮かび上がる 1990 年代初頭から 200 年代初頭にかけてジルバブ着用を始めた女性たちについての分析である。彼女たちのうち 5 人は高校時代からジルバブの着用を始めた。宗教学校に通う 1 人を除いた 4 人は、高校でロヒスと呼ばれるイスラーム組織の活動に参加し、そのきっかけはプサントレン・キラットと呼ばれるラマダン月に宗教学校で行われるイスラーム教室への参加だった。他方、大学からジルバブを着用し始めた女性たちの中には、進学先で多くの女性たちが着用していたから自分も着用を始めたという者、朝と夜だけイスラームを学ぶ大学プサントレンという施設で学んだ者、独学で学んだ者とイスラームの学び方は多様だった。

彼女たちのほとんどは、その家族が着用していなかったため、周囲からは驚きをもって受け止められた。彼女たちが身につけるジルバブには、大きく分けて厚い布で大きなタイプと大きすぎず、厚すぎない「中庸」のタイプがあり、大学のダアワ活動などで活発に活動している女性たちの多くは大きくて厚いジルバブを着用する傾向があった。彼女たちはジルバブを着用することで、男性のからかいから身を守り、外見ではなく、内側の美しさを見てもらえること、感情や行動を自制できると答えた。大学卒業後の職場でもジルバブを着用し続け、次の世代にもつなげていきたいと考えている。さらに、これらのヴェール着用者たちの中にはインドネシアのイスラーム政党である福祉正義党の支持者や党員になって活動する者もいた。

第 5 章「女性向けイスラーム短編小説の広がり」では、1990 年代から 2000 年代初頭にかけて若い女性たちの間で流行したイ

スラーム短編小説の広がりについての検証である。1980年代以降、イスラーム関連書籍が市場に流通し、また、スハルト体制下の教育水準と生活水準の向上に伴った大衆文学の発展から、イスラーム短編小説専門雑誌『アニーダ』が創刊された。この雑誌の読者の85%は女性で73%は首都圏に住んでいた。出版社の創設者や編集部、作家たちの多くは大学ダアワ運動に参加していた。また、新たな作家の育成のためのネットワーク「ペンの輪フォーラム」も、その人気を支えた。イスラーム短編小説の多くは、都市部に暮らす若い女性である主人公がイスラームに触れ、イスラームに傾倒していく姿が描かれている。これらの短編小説をきっかけにヴェールをかぶり始めることもあった。しかし、あまりに大量に出版され、2000年代半ば頃までに社会においてイスラームが急速に受容され、ジルバブ着用者が多数派になるほど増加したために、このブームは沈静化した。『アニーダ』は2005年に休刊した。これらの小説を読んだ女性たちは成長し、次の世代の女性たちが現れた。

第6章「『ジルバブ』から『ヒジャーブ』へ」では、2000年代前半から現在までの、新しいヴェール着用の広がりについて述べられている。2000年代初頭まで着用されてきた布で頭を覆ってピンで留めるスタイルのジルバブに対して、すでに縫製されて穴から顔を出すだけで着用できる「インスタント・ジルバブ」や「ブルゴ」が登場するなど、新しいヴェールのかぶり方が見られるようになった。その背景に、自らがヴェールをかぶり始め、ファッション誌の編集者になった女性たちがいた。インドネシア発のムスリムファッションは、政府の後押しもあり、海外進出を目指した。新し

いヴェールは、ジルバブと比べてカラフルでファッショナブルであることが特徴だ。デザイナーたちが「ヒジャーバーズ・コミュニティ」を設立し、イスラーム勉強会やトークショーなどの活動をするようになると、この活動は各地に拡大しジルバブは「ヒジャーブ」と呼ばれるようになった。このコミュニティの参加者たちは大学のダアワ運動とは関わりのないものであり、これまで一般の人々がジルバブに抱いていたネガティブな印象を払拭するものであった。ファッショナブルなヴェールやムスリム服は、これまでヴェール着用者が登場してこなかったインドネシア映画にも現れるようになった。ヴェールの多様な形が見られるようになったインドネシアでは、多様な解釈が存在し、多様な主体が自らの正当性を主張しているのが現状である。

このように、本書では1980年代から現在まで、インドネシアにおけるヴェールの着用をめぐる現象について、女性たちの意識の変化を政治や社会の変化とあわせて考察されている。現代インドネシアでは、1980年代以降、大学ダアワ運動に関わる女性たちによるジルバブ着用と、2000年代にはいつてからのファッション業界と政府が牽引したヒジャーバーズと呼ばれる女性たちによるカラフルでファッショナブルなヒジャーブの着用という大きく分けて2つの潮流が見られる。インドネシアの多様で寛容なイスラームが多様なヴェールを生み出し、今後も変化を続けながら拡大するであろうと筆者は結んでいる。

これらの2つの著作から、イスラーム諸国で見られてきたヴェール着用の増加現象をよりよく理解することができるだろう。欧米社会で考えられているような、女性た

ちが強制的にヴェールを着用させられているという状況は見られない。いずれの例でも自らイスラームを学び、主体的にヴェール着用を選択している。これまで一部の男性の宗教エリートたちによって狭い世界の中で語られてきたイスラームの知が、近代化やグローバル化に伴い、小説や映画など様々なメディアを通して拡散している現代社会において、女性たちが主体的な選択としてヴェールをまとうのだという。

しかし、ここで気になったことは、これらの論考ではヴェールをまとう決心をした女性側の見解だけが取り上げられていることだ。ヴェールをかぶる女性が増加しているかどうか、それを統計などで計測することは難しい。長期間に渡る観察が必要となる。1990 年以降の多くの研究者が 1970 年代以降くらいからヴェールを被る女性が増えたとの印象を語っていることから、筆者たちが言うように、ヴェールを被る女性たちは増加していることは間違いないのだろう。しかし、これまでヴェールをかぶっていたがかぶらないことを決意した女性はいなかったのだろうか。また、そういった女性たちは何を根拠としてヴェール着用をやめたのだろうか。また、1 人の人間が、TPO に応じて戦略的にヴェールのかぶり方を変えることはないのだろうか。また、その場合、彼女たちはそうする根拠を持っているのだろうか、という疑問が生じる。このような「少数派」の見解についても今後の研究で明らかにされることが望まれる。

どちらの論考も、それぞれのフィールドと長年関わってきた、現場を熟知している研究者による研究であり、その点でも信頼できる分析となっている。ヴェールを単に

抑圧の道具として捉えるのではなく、当事者たちの現状を知ることから共生が始まるのではないだろうか。